

## 翻訳とは ③

## 言葉と世界

通常われわれは、特定のものや概念の呼び名、そしてその意味を言葉として用いている。言葉と意味は不可分で遊離しない関係なのだろうか。それとも言葉と意味は遊離するものとして認めることができるのだろうか。

近代の言語学は、ソシュールの言語研究によるところが大きい。彼の研究はこれまで「構造主義」の名において言語学にとどまらず様々な研究や思想に影響を及ぼしてきた。彼は、世界の事物・対象とそれを指し示す言語記号の間の必然的な関係を否定した。つまり彼は事物とそれを指す言語記号の有契性を認めなかったのである。この考え方は「記号の恣意性」と呼ばれている。

言語記号は、その記号が指し示す概念（内容）と聴覚映像（形式）の結合であるとして、概念を「シニフィエ」（記されるもの）、聴覚映像を「シニフィアン」（記すもの）と規定し、「シニフィアン」を「シニフィエ」に結び付ける紐帯は恣意的であると彼は指摘した（ソシュール 1981:98）。馬をウマとよぶことは、ある特定の動機があつてなされるのではなく、その取り決めはあくまでもそれぞれの社会によって恣意的に行われるとし、馬をイヌと呼んでもよかつたというのが記号の恣意性が意味するところである。

文字や音などの聴覚映像は一度表現されると、それ自体は固定化し、二言語間においては転移不可能となる。翻訳における理論的な不可能性は、この言語記号の聴覚映像における形式転換の不可能性とも呼べるであろう。「シニフィエ」と「シニフィアン」の関係がもし必然的で絶対的であるならば、二言語間の翻訳は不可能であつたに違いない。しかしソシュールが示したように、この両者の関係に必然性はなく、また両者の関係には根拠もないので「シニフィエ」は流動的で転移可能なものとなる。ここに、翻訳の可能性を確認することができる。

言葉は実態を映す鏡のようなものである。その言葉と実態の間で両者を結びつけているのが意味である。その実態は見る者の立場や時代、社会など様々な要因によって変化するのでその両者を結びつけている意味も変化する。そしてその意味には、解釈する人にとってある特定の価値が付与されている。価値とは、端的に言うならばそのものの値打ちということになるであろう。1万円のカバンを例にすると、カバンの値打ちは1万円ということになる。しかし物質的に1万円＝カバンというわけではない。あくまでもその価値が当事者にとっては等しいことを意味する。翻訳の場合もあるテキストの価値を判断し、それに見合う価値を異なるテキストに付与するのが翻訳者ということになるであろう。そして、目標言語において、テキストを解釈する人がその価値を等しいと認める翻訳こそが理想的な翻訳となる。二つのテキストは全く同じとはなり得ない。つまり両者は1万円＝カバンのようにイコールで結ばれる関係とはなりえないが、その価値が等しく結ばれることは可能である。この意味の等価交換は、言葉の意味が文字や音などの形式から解放されることによってはじめて可能となる。

日本語で食事の際に取り交わされる「いただきます」は、食事を始める前に感謝をささげる言葉である。この言葉は、自分以外の他者、他存在に対する感謝の念から生まれた言葉であり、

ここにある種の精神性が宿っている。しかし、この「いただきます」を、「私はこれから食べます」と外国語に訳した場合、その独自の精神性という価値はもう存在しなくなるであろう。このように言葉を構成している様々な要素は、その文化圏における多様な価値体系の共存によって、相互にその価値を決定づけている。つまり、全体の体系におかれることによってはじめて言葉は意味を持ち、その意味の範囲は他の言葉との関係性によってさらに規定される。

しかし、ここで翻訳者は、起点言語と目標言語を二元的に捉え、そのはざままで等価だけを行う存在ではない。言葉は空間的にも時間的にも常に変異する。両者は固定的なある地点に根ざし、不動のものとして翻訳者に捉えられるわけではなく、起点言語によって記述されているテキストも、ある概念が文字化された一種の翻訳であり、翻訳の過程で翻訳者がその解釈を行うということは、原文が述べようとしている意味世界を永遠に追及していく作業ともなりえる。テキストは永遠に逃げていく「変異」という生命力を持っており、特定の言語で表現された時点から、常に追求される対象であるという側面を併せ持っている。

ベンヤミンは、翻訳とは「諸言語の異質性と対決する一種の暫定的な方法」と述べている（ベンヤミン 1994:79）。原作と翻訳は「純粹言語」と呼ばれる高次な言語でつながっていて、原作と翻訳されたものは相互に補完しつつ、隠れた種子が熟すように原作に秘められた本質が訳文の中で成長していくと彼は指摘している。

ベンヤミンは、現実態の諸言語は、相互に補完しうる志向性を有しており、翻訳によって「認識の完成」が可能となるとも考えている。我々は言葉によってこの世界の未知なる観念を一つひとつ明確に彫琢しつつ、その意味を決定し認識するようになる。

この世に生を享けた瞬間から、われわれは言葉の中に放り込まれ、その言葉によって人間として育てられる。言葉によって思考し、自分以外の他者と意思疎通を図る。そして他者との関係性の中に自身の存在を確立していく。その言葉は、身近であるがゆえに見えにくい存在なのかもしれない。言葉に先立つような観念などは存在し得ず、言葉が表れる以前には何一つ明確には認識できない。われわれは言葉を用いることによって意味を決定し、この世界の認識を一つひとつ積み重ねていく。その積み重ねの一形態が翻訳である。

真の翻訳は透明であつて原作を蔽い隠すこともなければ、原作の光を遮ることもない。真の翻訳は純粹言語を、翻訳の固有の媒体である翻訳言語によって補強され増幅された分だけ、原作の上へ投げかける。（ベンヤミン 1994:86）

このようにベンヤミンは、二言語間の意味の等価交換という翻訳の実際的な目的以上に、この世界の「認識の完成」という、より深遠な成果を翻訳者に課している。それは重い責任であると同時に、力強い励ましでもある。

[引用文献]

フェルディナン・ド・ソシュール（小林英夫訳）『一般言語学講義』岩波書店、1981年第10刷。

ヴァルター・ベンヤミン（野村修編訳）「翻訳者の課題」『暴力批判論 他十篇』岩波書店、1994年。